

第 46 回法政大学大学院まちづくり都市政策セミナー
「コロナ、都市の危機と再生を問う」

基調講演

陣内秀信（法政大学特任教授）

「今、真の都市再生とは？－自然・歴史・コモングの視点から」

共催：法政大学エコ地域デザイン研究センター

2021 年 12 月 18 日（土）

皆さん、お早うございます。久しぶりにリアルでこういうセミナーが開催できること、本当にうれしく思います。私も4年前まではデザイン工学部にいたのですが、その前は小金井の工学部にいて、その頃、全学の横断的なセミナーとして大学院まちづくり都市政策セミナー、途中で名前が1回変わったと思いますが、それに参加していました。学部代表で、よく参加して文系の先生方と熱く議論したのを懐かしく思い出します。これが継続して、法政の一つの大きな柱、顔になっていて、こうしてお呼びいただけること、大変うれしく思います。

テーマが非常に大きいので、基調講演を依頼された時に、果たしてどんな話ができるかと思ったのですが、振り返ってみれば、こういうパンデミックになる前から、もう現代都市、巨大都市文明にさまざまな陰りがあり、矛盾がたくさんあり、これをどうやって乗り越えるかという議論がいろいろ行われたと思います。しかし、それを社会的な動きにして新しい方向へ踏み出すのは、日本においては容易ではありませんでした。でも、こういう事態になった今、逆転の発想でこれを機会に、思いっきりそういう発想で皆さんと議論していければと思います。

私も長く生きてると本当にいろいろな時代の変化を自ら体験してきました。学生時代の60年代末には社会の矛盾に対し若い世代が問題提起をし、世界中で変革への動きが起こったわけです。しかし、日本の社会はなかなか変わらない状況もありました。その中で留学の道を選んだのですが、私はイタリアという国を選んだのは、近代化とか産業化とか、そういう世界を大きく変えていったヨーロッパ、アメリカの動きとはいささか違う、歴史があり、コミュニティがあり、魅力的な生活空間があり、自然が生きている、そういう国で、どのように次の時代を考えているのかを勉強しにいきたいと思い、イタリアを選びました。

図らずも、イタリアと日本は結果的には非常によく似た面がある。石の文化と木の文化で全然違うように見えますが、国土の大きさやあり方、自然が変化に富んでいる。そして文化も厚い、人々の関係も密度が高い。美しいものへの憧れ、おいしいものへの貪欲な追求が非常に似ていて、これは日本がこれから進むべき道を手探りでいろいろ検討していく時に映し鏡にして見ていくとヒントになることも多いのですね。逆に、日本からイタリアが学ぶこともたくさんあります。そういう関係でずっと並行してイタリアと日本を比較しながら勉強してきました。

では、早速いきたいと思います。まず、いろいろキーワードを並べてみたのですね。今

日登場するキーワードがたくさんあり、何となく話の方向性を想像していただけたと思います。タイトルは少し大げさに「今、真の都市再生とは？ー自然・歴史・コモンズから」としていて、それに関係し今日、話をしたいと思っているものがアトランダムに並んでいる。こんな感じでいきたいなということを察していただければと思います。

2020年春、パンデミックになったニューヨークに関するメッセージの画像が私の手元に届きました。中国から広がった COVID-19 のパンデミックはイタリアを襲い、それがだんだんヨーロッパ全体に、そしてアメリカにわたり、最大の悲劇的な状態になった頃のニューヨークですね。象徴的でした。早速、その 2020 年の 4 月か 5 月に、アメリカの友人の都市計画の先生からこれが送られてきて、衝撃を受けたのです。

ニューヨーク・タイムズに発表された記事についていた二つの画像なのですが、その一枚が、オランダ人が入植する前の、1600 年代の初めの頃を想定したマンハッタンの復元図です。都市が生まれる前の一面森で覆われた原風景です。もう一枚は現代のマンハッタン。これだけ高層ビルが並び、ぎゅうぎゅう詰めに都市が開発され、人間が自然を改編して都市文明をつくってきたことを示しています。まさに世界のグローバリゼーションを牽引してきた巨大都市。いろいろな矛盾があることは分かっていたわけですが、この際、原点に立ち戻って、都市文明とは一体何だったのだろうか、メガシティというのはどうなんだろうということを根本的なところから問い直そうとした記事です。非常に感銘を受けました。

新自由主義の過度な競争。これが都市空間を貧しくしたり、市民が集える自由な空間がなかなかなくなってきてしまう、そういう矛盾がたくさん出てくる。また、公益性や公共性にどうしても力が及ばなくなってくる。パンデミックの渦中では、そうした反省が生まれ、過去には 19 世紀末から 20 世紀初めに公衆衛生が重視され、都市に緑地を生み出そうとか、田園都市を作ることが試みられたたことを再評価する動きが専門家の間でも出てきました。

槇文彦さんという偉大な建築家がいらして、「アナザー・ユートピア」という論文を建築の雑誌に発表したのです。非常に感銘をみんなに与えました。彼はニューヨークに長くいたのですが、都市の中で思い出す、自分にとって意味のある空間は公園や広場だったというのです。そこに時代を越えて安定性があり、自分の思い出がある。そこにこそ人が集う、賑わう、交流する、歓びが与えられるということで、オープンスペースが非常に重要であることを訴えました。こうした彼の問題提起に基づき、異なる世代のいろいろな専門分野の人たちがまた論考を投稿して本が出たのです。こうした動きは、時代をまさに先

取りしていたと思います。その後、パンデミックの間にニューヨークでも緑地、公園、水辺の空間などが再評価されるようになったからです。

パリの事例が有名です。もう 20 年以上前から歩行者中心に変えていかなければだめだ。車を制限しようということで、この COVID-19 のパンデミックになる直前に、第 2 期の段階に至るイダルゴ市長、今の市長ですね。この間、東京オリンピックの閉会式に来ました。彼女が非常に熱心な環境派で、「15 分都市構想」を打ち上げ、その後パンデミックになるなかで、その考え方が、今後の都市づくりのモデルになると大きな注目を浴びています。

バルセロナ市ももう 10 年以上前から車を制限して、市民のためのオープンスペースを取り戻そうということを積極的にやっているそうです。最近、都市づくりの分野でも、オンラインでいろいろこういう講演とかレクチャーが多くあり、新たな情報が次々に紹介されています。

そもそも「都市再生」という言葉ですが、私が自負しているのは、この言葉を割と早い段階で使った 1 人ではないかということです。自分はそう思っています。実際、『イタリア都市再生の論理』は 1978 年 11 月に鹿島出版会から出したのですが、これは実は羽仁五郎の『都市の論理』からインスパイアされて付けた書名です。彼もフィレンツェ、イタリアを扱ったわけです。この『イタリア都市再生の論理』の前に『都市のルネサンス』（中公新書、1978 年 5 月）も出していました。イタリアに留学し学ぶなかで、まさに当時のイタリアが「都市再生」を目指していると自分自身、認識していました。

都市再生は日本でも非常によく使われるようになったのですが、完全に違う文脈で使われるようになりました。これは皆さん、よくご存じのとおり、内閣に都市再生本部ができた 2000 年代に入り、都市再生特別措置法もでき、特区という制度もでき、とりわけ都心の業務空間、あるいは商業空間の容積をよりアップして活性化させ、アジアの他の都市に対抗していくということです。これはだから、全然違う文脈に使われていて、自分自身で考えていたような本当の意味での都市再生が、日本でなかなか大きく展開していかないというもどかしさがありました。

そもそもなぜ私がイタリアのヴェネツィアに留学したかということですが、60 年代、我々の若い頃、高校生、大学に入る頃、日本は高度成長の時代にありました。近代化・西歐化・工業化が夢を与え、あまり疑いもなしに進歩を信じ、突き進めた時代でした。しかし、60 年代の終わり頃には矛盾がたくさん出てきたわけです。とりわけ公害問題が大きいですが、アメリカやヨーロッパでは、建築や都市の理論の分野でも、近代建築、近代化一

辺倒でいいのかという疑いが強まり、60年代にすでに相当議論されていたわけです。日本は少し遅れましたが、そういう価値観が動く時期に、我々は建築を勉強していました。後から振り返ると、都市の近代化で失ったものとして、自然との対話、歴史との対話、人の関係（コミュニティ）。この三つがあるのではと思います。今日の私の講演のサブタイトルにもなっているわけです。それを探しにヴェネツィアに行ったのではないかと後から思いました。

ヴェネツィアに行ってみると、日本で受けていた教育とだいぶ違う。つまり、都市というのは、歴史的ないろいろな時代を経験して積み上がってできている、と考えるのです。今日、すてきなポスターをつくっていただいたのですが、これもヴェネツィアの中世のイメージです。そういうものを近代都市計画はあまり評価しないで、機能的で合理的で経済の発展のために新しい形につくり替える。そこに連続性や個性をとというのは、なかなか出てこないわけです。しかし、それはおかしいのではないかとヨーロッパの人は早く気がついたわけですね。60年代に、さまざまなアクションがあった。ヴェネツィアもそうした動きを生んだ都市の1つで、私はここを留学先を選びました。ヴェネツィアは水上に自然条件を活かし複雑に成り立っている面白さがあり、詳細な古地図を使いながらこの都市空間を読み解くという作業は非常にスリリングでした。



ヴェネツィアの古地図 1847年

小さなイタリアの町とも出会ったのは、後に自分自身にとって非常に大きな意味を持つことになりました。75年にちっちゃな、南イタリアのプーリアのチステルニーノという町

と出会ったのです。丘の上にある素朴で、石灰で白く塗られた雪のような造形をもつ、本当に面白い町です。外階段が立ち上がり、袋小路も多い変化に富んだ空間は、建築を学ぶものには、一つずつ家を全部実測してみたいくなるような魅力にあふれる町でした。しかし、当時は、近代の開発から取り残され、みんな若者は都会に出てしまい、残った中高年の人たちは高齢化している。田園も肥沃ではあるけれど停滞した感じで寂しい。でもここには魅力があるなと感じていました。



1970年代中頃のチステルニーノ

そして、都市文明が大転換していく時期が当然くるわけです。都市は誕生から成長、発展、成熟、衰退へと推移し、滅亡してしまうものもありました。そして再生の段階を迎えます。右肩上がりにどんどん成長していく段階は、日本でももうとっくに終わり、こういう成熟、衰退。だから、次は再生が来なければいけませんよね。これをどうするかという議論があまりにもまだまだ不十分です。ここで重要なのは近代化、産業革命以前は、都市とその周辺の田園、つまり農地、山林なども含む。牧草地などもあるかもしれない。それが非常に一体となり、均衡のある発展をしていたということです。それをイタリアでは「テリトリーオ」というのですね。それが経済的にも文化的にも共通のアイデンティティを持った一体感のあるエリアを形づくってきました。それが近代の論理、工業化の論理、資本の論理でどんどん壊されていく。そのスピードもどんどん大きくなった。

しかし、先ほどから言っているように、ヨーロッパやアメリカでは 1960 年代に転換点が訪れます。そして、70 年代、80 年代は日本もイタリアも、面白い動きを見せました。反省の時代であり、ポスト工業、さらにポスト・モダンといわれました。この 70 年代、80

年代のイタリア、日本を比較しながら論じていきたいと思います。

日本は、ただ 80 年代中頃のバブルに入る頃から、また大きな経済発展の段階を迎え、そのバブルがはじけた後もグローバリゼーション・新自由主義に身を任せてきているわけですが、その限界が見えてきて、今、他の道をどうやって探したらいいかということが問われていると思います。ポストコロナでいろいろ反省も起こっている。

こうした流れの中で、大きな動きを生んだのが 70 年代前半のボローニャです。日本でも大いに注目されました。実は横浜市は革新系の飛鳥田市長の下で、田村明さんという後に法政でも教えてくださった都市プランナーが頑張っていました。横浜の人たちもボローニャに視察に行って、市民参加の都市づくりを学びました。当時のボローニャは市民のための都市政策を目指し、歴史と現代をつないでコンパクトシティにしていく。100 万都市を目指そうと思えば目指せたにもかかわらず、それを意識的にそうしないで、適切な規模を保つことを考えた。そして資本がどんどん展開して変容しつつあったヒストリック・センター、旧市街を市民のために取り戻そう、というかなり強烈なスローガンを掲げました。つまり、最初にお見せしたマンハッタンの高層ビルが建ち並ぶ競争社会の状況とは違う方向に行きたいというメッセージを 70 年代に提起したのです。

この旧市街、市壁の内側のすべての建物が建築類型学の視点から見てどんなタイプなのか、どんな用途にふさわしいかを分析図示しました。



ボローニャのチェントロ・ストリコ 建築類型分布図

そして特に庶民、低所得者層が住んでいる地区に注目しました。取り残されて住環境が悪化し、スラム化も見られました。一方、中心部は派手にお金をどんどん投資して立派になっていく。同時に、郊外に拡大発展する。それを反省しました。郊外の発展のためのニュータウン建設の予算を旧市街の庶民地区へ振り向け、ここを再生していく。歴史的に形成された庶民の住宅地の再生にお金を投資したのですね。それが大成功しました。これこそが真の都市再生だと思います。



甦った古い町並みとコミュニティ

70年代は、本当にヨーロッパが人間のために都市を取り戻していく方向に舵を切った時代だと思います。私がヴェネツィアに留学してすぐに起きた73年のオイルショックが大きかったのです。イタリアの大都市でも車を締め出す社会実験がしょっちゅう行われました。ローマでも、有名なナヴォナ広場でさえ車があふれていました。これでは魅力ある広場はできません。それを追い出し、居心地の良い素敵な公共空間になっていったのです。



車が溢れていたローマのナヴォナ広場
(提供：Prof.M.Vittorini)

70年代は都市文明の見直しの時期でした。ローマクラブの有名なレポート『成長の限界』が72年に発表されました。それから、シューマッハーの『スモールイズビューティフル』という本が73年。幸い私の建築史の指導教授、稲垣栄三先生がこうした新たな学問的な潮流に強い関心を持ち、ゼミで紹介してくれました。玉野井芳郎、清成忠男といった方々を中心に、「地域主義」という考え方が唱えられ、横浜では飛鳥田市長のもと、田村明氏が牽引するアーバンデザインの活動が展開しました。60年代からの公害問題はまだ解決していない面がありますが、開発追求型の発想から、環境の質を求める方向への大きな変化が見られ、今日のまちづくりへ繋がるテーマがどんどん掘り起こされました。

70年代から80年代前半にかけては、知的刺激に溢れる時期でした。様々なジャンルで興味深い著作が次々に発表されました。奥野健男さんの『文学における原風景—原っぱ・洞窟の幻想』（1972年）が大きなインパクトを与えました。この「原風景」という言葉がすぐれて日本的な近代化とか工業化への抵抗の論理だったのではないかと私は思います。そこから触発され、川添登の『東京の原風景』（1979年）、芦原義信の『街並みの美学』（1979年）、槇文彦の『見え隠れする都市』（1980年）といった、建築の分野での素晴らしい著作が生まれました。どれも日本の独自の文化、歴史、空間の特質を深く理解しながら次の時代を切り開く、そういう論考だったと思います。「場所論」がそこから出てきます。イーファー・トゥアンの「空間」ではなく「場所」という言い方とか、シュルツの「ゲニウスロキ」（地霊）もそうです。そして、景観という問題が非常に重視されてくる。これが70年代です。

80年代はそういう70年代の試行錯誤が大いに身を結び開花した時期で、日本とイタリアが両方同時に、面白い都市の状況を見せました。私はイタリアで学んだことを活かし、法政で教え、東京のことも調べ始めていたので、それを実感していました。多分80年代前半が、近代日本の都市の歴史の中で、昭和初期のモダン東京の時期と並び、人々が一番生き生きしていた時期ではないか。つまり、経済は横ばいが故に、大規模な開発が影を潜めていたのですね。だから知的に想像力を働かせいろいろなことを考案、提案し、実践する。規模は小さいが創造的である、そういう時代ですね。

イタリアもまさにそうだったのですね。70年代、政治社会的に不安定で、テロや経済破綻やストライキばかりだったのが、だんだん上向きになってきた。この時期に、大規模工業、大都市中心を抜け出し、家族経営の中小企業が頑張り、クリエイティブなデザイン、ファッションなどの分野が成長し、そして「第三のイタリア」と呼ばれるようになる中北

部イタリアの中規模な地方都市が元気になった。量から質へ、地域の資産が活かされ、創造性、美意識・感性といったイタリアらしさが発揮される。こうした動きが全面的に開花したのが80年代でした。70年代はそこへ至る生みの苦しみの時期でした。中でもトレヴィーゾというヴェネト地方の町が本当に魅力的に輝きました。



トレヴィーゾのシニョーリ広場

もう一つ、当時有名になったのがコモという町です。ヴェルサーチというデザイナーが登場したりして、かつての養蚕、絹織物の伝統を生かし、新しいクリエイティブなセンス、技術によってファッション、アパレルの世界のトップを走りました。古い町並みも素敵なショップを演出するのに活かされる。いろいろな生産の場は都市周辺に散らばってネットワーク化され、*distretto industrial*（産地）という言葉が使われるようになり、まさにテリトリーをもう一回作り直したと言えます。法政大学の岡本義行氏や稲垣京輔氏が、こういう研究をずっとなさいました。

一方、80年代の東京に目を向けると、やはり文化力を大いに発信しました。特に、渋谷を舞台にパルコという西武の文化戦略が登場し、若い人々がオシャレをしてはつらつと街路を歩き、町を回遊する面白さを生み出し、都市空間が楽しくなりました。程よい規模のよく考えられた質の高い開発が成功の秘密で、大規模開発ではないのですね。

原宿もそれに連動して動き始め、若者の町として世界から注目を浴びました。実は、オリビエロ・トスカーニというベネトンのキャンペーンの広告を担った写真家が、原宿が大好きになり、若者たちが本当に奇抜な自由な服装をしていることに注目しました。



原宿・竹下通り 1980年代前半

ところが、ヒアリング、インタビューを何百人にもしてみると、誰も政治のことを知らない。あまりの関心のなさに驚いたようです。これが近未来の世界を先取りしているのではないかという警鐘も鳴らしました。とはいえファッション、ビヘイビアからすれば日本の若者のあり方は一つのインパクトがあるものでした。都市は舞台としての魅力を発信し、私も原宿の、こういう回遊性のある町は大好きで、いいなと思っていました。

80年代には、代官山のような山の手の緑あふれるエレガントな都市空間が人気を集め、一方、芝浦のようなウォーターフロントも話題を呼びました。



話題を呼んだ芝浦の水辺空間 1980年代前半

こうして緑や水を取り込んだ新感覚の都市空間が生まれたのです。もう一つ、歴史的環境の発見・再評価も東京の中でも起こった。森まゆみさんたちの谷中・根津・千駄木、いわゆる「谷根千」の活動です。これは画期的でした。

私は欧米の都市計画からの呪縛から解かれるというか、東京を解説する調査研究を法政大学の学生達とやり始め、イタリアで学んだ方法を東京に応用しました。東京は凸凹地形で、自然条件が実に面白い。これは欧米の都市にはないことです。それを我々日本人がすっかり忘れていて、近代的な大規模な画一的な開発ばかりに目を向けていた。しかし、この個性的な条件、資産を活かさない手はないと考え、古地図を重ねながら町の成り立ちを理解し、そして歩いて体感する。このような町歩きは、かなりの人たちに面白い、価値があるということを確認していただくことになったわけです。後の「ブラタモリ」もそういうことで生まれてきたと思います。



古地図を活用した町歩き

ところが、80年代中頃に江戸東京ブームが来たのですが、同時にバブル経済に突入する。そうすると出版界の状況も大きく変わりました。あのPARCOも『「東京」の侵略』という本を出す。早稲田大学の尾島俊雄先生の『東京大改造』。こういう方向に行ったわけです。横浜や千葉が先にウォーターフロント開発に取り組んだのに対し、東京都は臨海副都心計画を慌ててつくりました。

ランスは、意図的に田園を対象としたのですね。歴史的な都市はもう十分に評価され、いい感じで再生できているという判断があったと思います。「文化的景観」の保全はユネスコが重要な課題に掲げていて、日本でも熱心に取り組まれています。

実は私の法政の研究室で退職する前、何年間かオルチャ溪谷というトスカーナ州の素晴らしい景観を持っている地域の調査を、現地の方々に協力してもらってやりました。ここは 2004 年に世界遺産に登録されたのですね。何でもない農村風景、田園風景が世界遺産になった。



オルチャ溪谷の田園風景

これはやはり人類の長い歴史の中で、画期的だったのではないかと思います。都市化することがいいことだ。都市文明が人間を幸せにするとみんな思ってきた。世界中、都市人口がどんどん増えているので、まだその動きは強いわけですが、成熟社会に入った国々では、そういう農村風景、田園の豊かさを評価する感性が生まれてきている。日本も本来、成熟社会に入っているのですから、共同歩調をとっていいはずですよ。イタリアでは 70 年代はチェントロ・ストリコ、旧市街の保存再生だったのが、80 年代にはそれを達成し、次のステップでテリトーリオ、田園へと意識を向ける。景観法もアグリトゥリズム法も同じ 85 年に成立し、86 年には重要な役割を持つスローフード運動が始まります。

トスカーナ州のオルチャ溪谷は、五つのコムーネ、自治体、基礎自治体からなっていて、

いずれも小さな規模です。最大のモンタルチーノでも人口は6千人未満です。連携しているからこそ意味がある。日本は市町村合併がどんどん進んでしまったこともあるけど、自治体同士が横につながり、ある広がりを持ったエリアで、共同歩調でアクションを起こすのは、なかなか少ないですよ。イタリアを見ていると、小さい自治体が連携して個性を發揮して、みんなで頑張り、イメージアップしていくというストラテジーを持つようになっているのを感じます。

同時に、地産地消を掲げるスローフード運動に象徴されるように、イタリアでは都市と農村の結び付きを甦らす動きが強まっています。テリトリーオの考え方ですね。オルチャ溪谷の町は、小さな村のように見えているものでも、かつて中世は独立した自治都市で、都市条例、*statuto* というのですが、これをみんな持っていたのですね。町の開発、建設活動を誘導し、制御し、同時に農村、農業の営みまで誘導していたのですね。耕作地に動物や泥棒が入って損害を生んだときのペナルティをどうするかとか、細かく自治の精神で規定をつくってきました。美に関するものから農業生産まで条例が定めているのはすごいと思います。実は日本の農村にも、その営みを方向づける様々な史料が残されているようです。

飯田市が歴史研究所をつくっていて、大変熱心に文書の解説などやっていますが、この間もシンポジウムがあり、日本の農村にも史料がしっかり残っていて、研究すればするほど、それなりの自治があったのが分かってくる。要は、そういうことをみんな忘れてしまい、都市化、さらには大都市への一極集中に走ってきましたが、そろそろ変えていかなければいけないのではないかと、ということです。

マックス・ヴェーバーはイタリアの都市を南欧型都市と見ていました。アルプスの北のドイツとかベルギーに理想的な商業都市が発達し、市民自治が育まれたのに対し、南欧では都市の中に地主が住んでいて、封建的要素がぬぐいされなかったという感じなのですね。そして近代化、工業化以後は農村的なものを残存させているのは遅れた形態と見られがちだった。ところが、いま 2000 年代に入ると農業的な性格、ルーラルな性格が身の回りにある、農村と都市がつながっているのは最大のアドバンテージになってきている感じがします。

スローフード運動、それをさらに発展させ、まちづくりに持っていったのがチッタ・スローの運動です。地産地消をベースとし、本物の歴史、文化を大切にする。規模を大きくしない。すでに見たように 80 年代にイタリアでは中小規模の都市が魅力を発信し始めた

のですが、そうなるとその周りに今度、田園が見えてくるわけです。大都市の周りでは田園は見えにくいですが、中小都市の周りにはすぐ美しい田園が広がっている。そこへ関心が広がった。ファッション、デザインを中心にメイド・イン・イタリーの力は今も続いています。それに次いで今は農業生産物、畜産品がイタリア経済にとって大きな役割を演じています。そういうものがブランド化して経済発展、輸出の産品としても非常に重要になってくる。

こうなると小さな町が経済的にも元気になってきます。もともと田園と町の中が繋がっていて、城壁の中に農民がたくさん住んでいた。これが過疎化に伴い空っぽになってしまっていたのを、リノベーションして新たな用途に使う動きが広がっている。カステリオーネ・ドルチャの町で、ローマの建築家の夫婦が農家を取得し、セカンドハウスとしてリノベーションして使っている例を見ました。不動産の資料で、1階が馬小屋だったことが分かりますが、そこが台所と食堂に見事に転じている。



馬小屋を改修した台所と食堂

こういう古い建物をリノベーションして格好いい空間に蘇らせる動きは日本にも広がりつつあります。アグリトゥリズム（農場観光）の中には、優雅な空間を生み出し、ゆっくり田園生活を楽しめる場所が多い。



優雅なアグリトゥリズムモ ピエンツァ郊外
(撮影：福留由莉子)

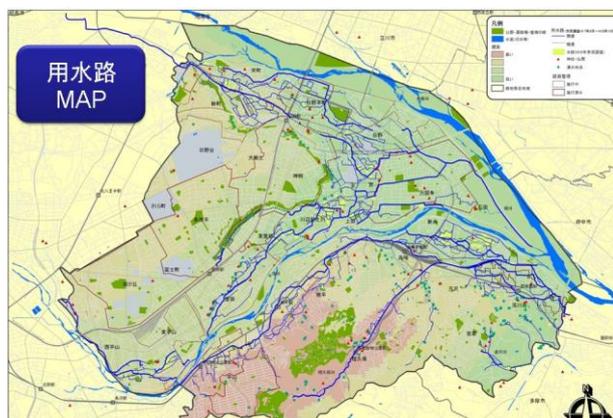
結果的には経済産業構造も少しずつ広がっている。デザイン、ファッションも相変わらず重要ですが、それにプラスしてワインやチーズ・生ハムの畜産品、そういう農産加工品がどんどん広がっている。中小都市と田園がその舞台で、伝統の技、人材、経験が生かされており、食文化というのは、実は都市と田園を結ぶ重要な鍵となるものなのです。食文化といえば日本のお家芸のはずなので、テリトリーオの一体感を生む上で、日本でもこれからもっと意識化して追求すべきものです。イタリアの人たちと話をしていると、キロメトロ・ゼロというキーワードがしょっちゅう出てきます。つまり、生産者と消費者が、ゼロキロメートルが理想である。新鮮な食材をたっぷり取り入れ、地元の郷土料理を美味しく食べるという、そういう文明的な転換の意識が、いま非常に盛り上がってきているのですね。

エノガストロノミアという言葉が重要なキーワードになっています。イタリアのワイン文化は実に多様で、ブドウの木が少なくとも 2000 種はあるとのこと。それがフランスと全然違う。それぞれの地域に地のブドウの木がありますが、これがギリシア起源とかエトルリアからつながっていると、そういう歴史的なイメージを膨らませてくれるのです。気候風土、風向き、地質などの自然条件、テロワールに加え、歴史、文化、伝統技術、共同体のありかた、風景の魅力など、まさに自分の地域、テリトリーオならではの特徴を熱心に研究し、個性豊かなワインづくりに取り組んでいるのです。ワインと食文化が結びつ

き、ルーラルツーリズムの大きな魅力にもなり、これがポストコロナには一番期待されるものだと言われているわけです。

東京の郊外の見直しも、だいぶ前から起こっているのですね。次々に本を出す、友人の三浦展さんが『コロナが加速する格差消費』（2020年）という最近の本の中で、コロナ・パンデミックが都心から郊外への流出を促進するだろうと書いているわけですが、2000年代から郊外の価値の再発見は進んできたと思います。法政大学には、私達がつくったエコ地域デザイン研究センターという組織があり郊外研究も行ってきました。そこで、日野をテーマに法政大学と日野市が連携事業としてオフィシャルに3年間取り組み、長野浩子さんという、法政で頑張っていた研究者が日野の人たちと仲良くなり、様々な活動を推進してくれました。法政市ヶ谷キャンパスのすぐ近くにKADOKAWA本社がありましたが、所沢に本体をだいぶ移し、武蔵野ミュージアムというのもつくりましたよね。『武蔵野樹林』という素晴らしい雑誌を創刊して、これからは都心ではなく武蔵野だというメッセージを彼らも発しているのですね。

日野は環境の意識がものすごく高い自治都市で、条例をつくったり、市民も熱心でした。しかし、水の環境だけに限定されていて、自分たちのテリトリー、地域全体の特徴をることがなかなかできていなかったのですね。我々がそれをやりました。地形、湧水、古道、江戸時代の街道、そして神社やお寺、それからもう一つ、遺跡ですね。遺跡の分布も非常に重要です。それを重ねると縄文時代から人がどう進んできたのかも分かる。近世に、多摩川と浅川から水を引き、用水路がネットワーク状にでき、それまであまり農地になっていなかった沖積平野が豊かな穀倉地帯になるのですよね。水田が多い。これは日野の特徴でした。



日野の用水路網（提供：法政大学宮下清栄研究室）

農業政策が日本では弱かったので、市街化区域は宅地化せざるを得ない状況になり、東京都内の農地がどんどん減っているのが残念です。仮に水田が減ったとしても、こういう用水路は、環境用水として景観的な価値を持ち、人に憩いの場、あるいは環境教育を生むなど、あらゆる面で重要なわけですから、仮に元の役割を失っても、それが次の時代に大いに財産になるという、そういう志向性が必要です。もちろんポストコロナ社会においても、最も求められる貴重なオープンスペースでしょう。

法政大学エコ地域デザイン研究センターでは行政と市民と一体となり、日野塾というワークショップの活動を行い、学生も頑張り、みんなと一緒にリサーチして、用水路のマップをつくりました。



日野の用水路マップ

「せせらぎ農園」という市民農園の活動も注目されます。生ゴミ回収から始め、都市農業を守ると同時に、コミュニティ活動の拠点となっていて、いま全国でもモデルケースになっています。ただ、なかなか今の制度、政策ではこういう活動を十分にサポートできていなくて、結局ここも区画整理で撤退せざるを得ないような状況にあるようです。幸いまた別のところに引っ越して活動すると聞いています。



日野市新井地区のせせらぎ農園

一方、イタリアではキロメトロ・ゼロの思想が定着してきました。私が留学時代の70年代前半に訪ねたチステルニーノには、その後も何回も行ってはいますが、行くたびによくなるのですね。元気になっている。旧市街の家々も修復再生されてきれいになりました。

甦った
チステルニーノ旧市街



農村、田園が豊かになった感じが本当にひしひしとします。風景にも、何か活気が出てきた。実際、放置されていたトゥルッリという三角屋根の農家がリノベーションされているケースが増え、セカンドハウスなどに使われている。

マッセリアという農場が修復再生され、新たな機能を付加されるケースも増えています。新たなビジネスも生まれます。町の中に肉屋が何軒かあり、田園の畜産農家と提携を結び、肉を取り寄せるわけです。店先のショーケースをお客さんが見て肉を選び、注文すると厨房に持っていき、出来上がったものを屋外で食べる。実に面白いアイデアです。こうして町と田園がより密接につながる。

完全に放棄された農村集落が見事に甦った例には驚かされました。中部イタリアの建築学部で学んだ地元の若手建築家が、グローバルなセンスも身につけ、保存・再生・活用とこのことの魅力に取りつかれ、故郷で頑張っている。チステルニーノ郊外のトゥルッリ集落全体を再生し、高級宿泊施設として甦らせたのです。このように、地元どんな素材があるか、どんな固有性があるか。若い世代の建築家は、新たな課題にチャレンジしています。



甦ったトゥルッリ集落

チステルニーノのある Valle d'Itria (ヴァッレ・ディトリア) という地域では、四つ、五つの自治体が連携して、この由緒ある名前を前面に押し出し、美しい丘上都市と田園の風景を売り物に、アイデンティティを大いにアピールしています。複数の自治体が連携してテリトリー戦略を展開しているのです。

チステルニーノの隣町、オストゥーニも知る人ぞ知るいい町です。斜面都市の段差のあるところを生かし、屋外にテーブルを並べ、気持ちのいいレストランが生まれています。サービスはさぞかし大変ですが。しかし、ここで食事をした体験は忘れられません。地元食材を活かした料理も最高でした。

オストゥーニの屋外
レストラン



そういう食文化の豊かさを支えているのはマーケットなのですね。ウィークリー・マーケットが町はずれの屋外駐車場を使って開催されます。車がたくさん集まってきて、屋根の下に仕込んでいるテントを自動的に開いてお店になります。実用的なテクノロジーは見事です。かばんや衣類も売っていますが、新鮮なあらゆる食材が、まさにキロメトロ・ゼロの思想で、エノガストロノミアを支える。実はローマのような大都市でも屋外マーケットが活発で、こういうセンスが感じられるといいます。大都市の内側にルーラルなもの、農村とのつながりが入っていることは、これからの都市にとって最大の魅力になるのでは

ないでしょうか。ポストコロナの視点からも重要だし、そういう余裕あるライフスタイルを目指し、このように変えていかなければいけないのではないかと思います。

東京の中のキロメトロ・ゼロの動きも結構あります。最も有名なものの一つは国立にあります。国立というと、日本のデベロッパーの先駆け、箱根土地株式会社が関東大震災直後に、一橋学園を開発したことに始まります。西欧風のモダンな町づくりでここだけ有名になりましたが、実はこの地域の本来の中心は南の谷保だったのです。その高台に甲州街道があり、崖線があり、その斜面の下に湧水がたくさんあり、多摩川などの水系から水を引き、用水路を巡らせて近世に穀倉地帯ができた。

国立という名前は、国分寺と立川が合成してできた新しい近代の言葉にすぎず、この地域ではそもそも谷保というエリアに人々が住んでいました。湧水を利用して平安時代に誕生した谷保天満宮の裏手には、今もコンコンと水が沸いています。

谷保の農地に若い人たちが結構入り、いろいろなアクションを起こし、一橋大学のゼミでも応援しているところがあると前から聞いています。都市と田園の交流の新たな現代的なスタイルですね。「くにたちはたけんぼ」という農園では婚活の場としても企業研修でも使われ、新しい経験と交流の場になっています。エノガストロノミアにもつながる。言ってみればスローシティではないかと思います。自然、歴史、文化、人間の蓄積を生かしたサステイナブルのまちづくり、これこそポストコロナの重要なあり方です。



都市農業を担う「くにたちはたけんぼ」

市内では昔から都市農業で有名なのは世田谷区と練馬区です。そのための部局が区役所にちゃんとできていて、練馬では最近、都市農業の国際シンポジウムもやりました。

実は遅れていたように見えた私の住む杉並区も、今の区長はこの点では熱心らしく、「すぎのこ農園」という名の農福連携農園を井草にオープンしました。農地は市民農園として区が借りてやっていたのですが、それを買い上げた。そして、農家の家屋そのものを地主から寄贈されたのです。それを解体して部材を生かし再建。しかもハンディを持っている方々がそこで活躍できる場となっている。そういう農地保全、環境、景観、防災、生物多様性、健康、この辺り全てを交え、まさにコモンズとしての役割をここに生み出した。これは画期的なことです。大都市の中にスロースシティが生まれたという感じです。確かに井草とかこの辺、西武線沿線は農地がたくさんあり、中野区にも広がっています。法政の海外から来られる客員の先生方が泊まるゲストハウスが上鷲宮にありますよね。あの周りも結構、駅に行く途中に農地が多くてびっくりしました。だから東京はまだそういう意味で可能性は大いにある。

次に、水都の比較をしたいと思います。つまり水の都市、ウォーターフロントはオープンエアだし、パンデミックにもいいはずですよ。といってもヴェネツィアは最初に、大規模に COVID-19 の感染が広がり、カーニバルも中止になったというぐらいで、まさに観光客がゼロになってしまった。逆に水が透き通ったとか、魚が戻ったという報道もあり、あるいはきれいな町並みが戻ったという言い方もありますが、観光客が来なくなったのは深刻です。経済事情は大変ですが、最近では、大型クルーズ船がこのように歴史都市の中心にまで入っていたわけです。オーバーツーリズムの問題を一番象徴していたのはヴェネツィアです。このパンデミックをきっかけにまたクオリティの高い文化観光、創造文化都市にしていきたいというのが、今のヴェネツィアの考え方です。

そもそもエコシティを目指すという考え方がヴェネツィアでは、もうずっと前から語られていました。1966年に大水害があり、地下水のくみ上げをやめたり、あるいはアドリア海からの3ヶ所の入り口に可動水門をつける問題でも、いろいろ議論して結局、それを実現しましたが、ラグーナ全体の自然をよみがえらせることに力を随分入れてきました。

そういう中で、観光を有名なヴェネツィアの本島だけに集中するのではなく、もっと分散してゆっくり過ごそう。そういうスタイルのツーリズム、滞在というものが人気になり、じわじわ広がっていたのです。ボートでアプローチできる水上レストランでの食事も最高です。



ラグーナの水上レストラン

実はパンデミックになる直前、2020年の1月13、14日にヴェネツィアのカ・フォスカリ大学で国際シンポジウムがあり、当時の田中優子総長はじめ法政大学から10人ぐらいで行き、イタリアの研究者たちとヴェネツィア・東京の水都比較の研究交流を行いました。そこである女性の研究者が発表してくれたのが本当に感動的でした。ヴェネツィアのラグーナの中で、最近、ワインとオリーブ・オイルを生産しているというのですね。かつて生産が行われ、それが途切れていたのをもう1回復権させたとのこと。これが話題になっていて、ヴェネツィアでつくられたワインとしてブランド化されている。それとオリーブ・オイル。実は、負のイメージを持っていた島の隔離病院をリノベーションして超高級ホテルになっているのですが、庭にオリーブ畑がつけられ、泊まった人たちはその恩恵にあずかれるということです。これも見事な発想の転換と言えます。

ヴェネツィアが水都としての関心をラグーナへと広げているのと同様、私も水都東京を広げて考えつつあります。長らく、中心部の日本橋、隅田川、ベイエリア、深川あたりを中心に水都と言ってきたのですが、それだけでは少し物足りない。もっと東京ならではの水都概念があっただけではないかと、だんだん思うようになってきました。

例えば、幕末近くの江戸近郊を描いた古地図を見ると、下のほうに江戸城があり、そして外濠があり、多摩川、そして隅田川、荒川、利根川とありますが、あとは渋谷川とか神田川とか中小河川が細かく描かれています。



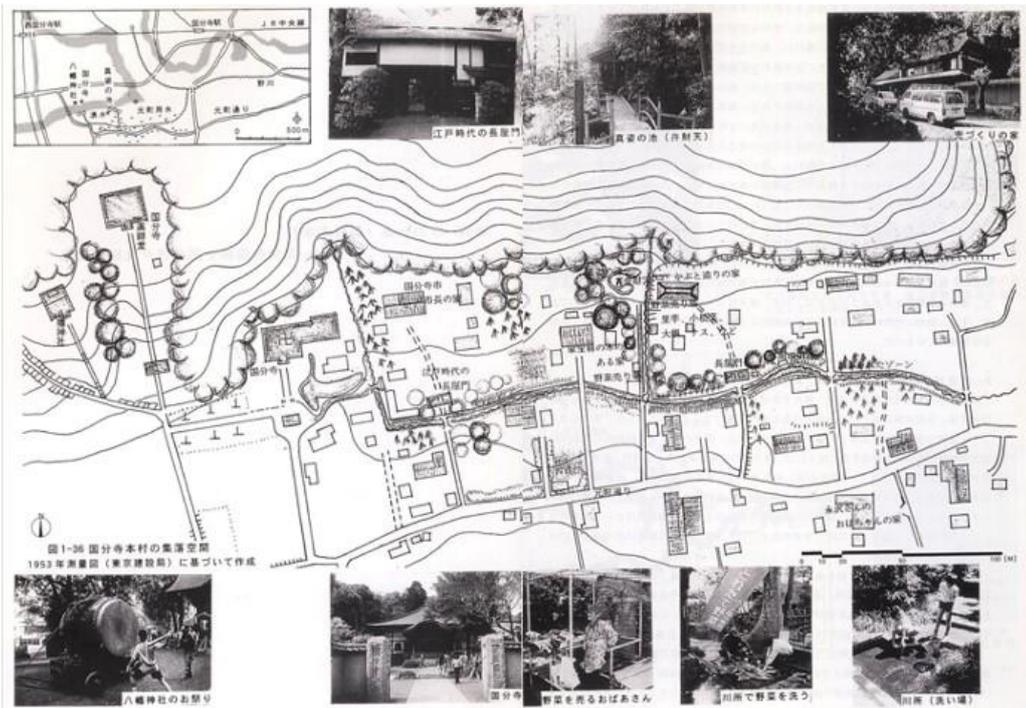
東京近郊図1830年（国立国会図書館所蔵）

こうして武蔵野・多摩まで全部ひっくるめて水のネットワークが巡って、この江戸と周辺のエリアに、水のテリトリーができていたということを地図が物語ってくれているわけです。こういう意識を我々は失ってしまった。郊外にどんどんベッドタウン化して市街地が広がり、それはそれで一つの方向だったわけですが、みんなベッドタウンに寝に帰るだけ。その地域、武蔵野・多摩地域の歴史とか環境とか文化的価値はあまり認識しない。

ところが、そうではない。本当は江戸よりもそちらが古いのです。府中・国分寺は元より、八王子だってそうだし、日野だって古い歴史がある。東京都心よりも古いのですよね。縄文遺跡もあちからたくさん出ています。そうやって発想を転換し、それと水の都市を絡めると、このテリトリーの空間がもっと面白く見えてくる。

実際、東京を新たな視点で捉え直すべく、我々はいろいろなアクションを起こしてきました。エコ研では外濠にずっと取り組んでいて、大日本印刷とか理科大の人たちも加わり、学生諸君、先生たちが一緒に頑張り、そこに企業連合も入ってきて、社会的な関心がずいぶん高まってきました。ところが、まだ肝心の水が汚れているわけです。

水が本当は循環していたのです。それに目を向ける必要が出てきました。江戸時代の玉川上水建設の事業は大変なもので、多摩川で、羽村から取水した玉川上水が尾根を通っ



「お鷹の道」周辺 崖線と湧水群

崖線の下「お鷹の道」。だから、上の台地で開発してマンションがどんどん立ち、舗装で覆われてしまうと、地下水が涵養されなくなり、脇水が途絶えるのですが、その開発をストップさせた場所でもあるのですね。

ポストコロナに向けたランドスケープの専門家たちのセミナーで知ったのですが、「国分寺ぶんぶんウォーク」という活動があり、分散とネットワークを掲げ、お鷹の道だけではなく、国分寺のいろいろなところにある緑地を巡って歩き続け、今年で10年目だそうです。どこにも歴史があり、農業もやっているわけです。こうして都心から少し郊外に出ると、素敵な活動があるのでですね。

湧水をプロットしてみると、本当にたくさんあります。殿ヶ谷戸庭園とか、東経大の構内にもいい湧水があるし、それから国分寺駅に近い日立の研究所が有名です。その湧水の池から野川が出ていく。このように恵まれた共通の特徴を持つこの辺が自治体を超えて連携して、一つのテリトリーとしてアピールすることがこれから重要になるのではないかと思います。今のようにバラバラなのでは力にならない。

ここからが今日のメインテーマ、究極まで突き進んだ都市文明からいかに脱却するか、を考えてみたいと思います。冒頭に自然との対話、歴史との対話、そして人間の関係（コ

コミュニティ) という、3つの復権させたい重要なテーマをあげました。

その中から都市と田園のつながり、あるいは小さな都市が連携して、一つのポテンシャルの高い農地や緑地も含んだ、人間にとって、これからの居住にふさわしい、そういうものを意識的につくっていくテリトリーオの考え方を述べました。そこにはシビックプライドではないですが、「テリトリアルプライド」があつていい。つまり、ベッドタウンに住んでいるだけではだめで、そこに歴史があり、文化があり、いろいろ面白い仕掛けがある。そういう認識で、それと連動する形で、パリのイダルゴ市長が言っている 15 分コミュニティ論、15 分都市論というのがあることを去年、ある本で見つけました。

我々仲間内では、この考え方がしばしば話題になりますが、それは私が言っている大都市の中のスローシティ化というのともつながっているのではないか。スローシティ化はイタリアでのあるシンポジウムで、大都市の中にもスローシティがあるのではないかということ南米の参加者が言っていて、面白いと思いました。それには歩行者空間化が重要だし、ウォーターフロントの再生も有効です。実はコロナ・パンデミックの前に東京都が、船での通勤を目指す舟運の復活のための社会実験をしていました。ぜひ、実現したいものです。それから水辺カフェなどなど。

私に関心をもったパリの 15 分コミュニティ論については、この間、オンライン講座で岡井有佳さんという方のパリの報告を視聴しました。市長がそのイメージスケッチを示しています。15 分都市で、要はゾーニングをして機能を分けてしまうという近代都市計画ではなく、あるエリアに何でもそろっている。願わくば 15 分で徒歩あるいは自転車で行ける。カフェも、学校も、病院も、スポーツクラブも、映画館も、図書館も、何でもそろっている。商店街も。さらにテレワークが前提ですが、そこに職場もつくれる。実際問題としてはパリでも職住近接で職場を新たにつくるのはそう簡単ではないらしいのですが、本格的に考えているのですね。特に車を排除、少なくしていく。速度を落とす。これは CO₂ の問題もありますが、実際に進んでいるようです。自転車を活用し、従来の駐車スペースは公園や緑地や農地にしようという発想です。

実はミラノもパンデミックになった 2020 年 3 月に自転車都市構想を発表し、驚きました。ミラノに住んでいる日本人の友人に聞いたら、そんなにきれいに行っているわけではないとは言いますが、少なくともこういう計画を自治体が真っ向から提案する、取り組む姿勢が素晴らしいと思います。

ニューヨークのハイライン。パンデミックの時期には、入れないこともあったようです

が、今は多分、人気になっていると思います。公共空間の上に通っていた物流のための貨物用高架鉄道を壊そうという計画を、市民が反対して保存しよう、活用しようということでコンペをやり、見事にいまニューヨークで一番人気のスポットになっているわけです。周りの不動産価値もどんどん上がっている。これはポストコロナに一番向いている公共空間、まさにアナザー・ユートピアの榎さんがおっしゃるオープンスペースの一番いい例だと思います。

東京でも少しずつ進んできました。自治体と民間企業、財界、市民、そしてNPO、専門家が連携して頑張り、ウォーターフロントがどんどん再生しているのが大阪です。東京はバラバラです。何とかしたいという思いで、水都東京・未来会議という組織もでき、私も加わっているのですが、なかなかダイナミックには進まない。その中で幸い、寺田倉庫が中心になり、天王洲では成果を上げています。

ようやく竹芝棧橋で水辺再生プロジェクトが実現し、色々な施設がオープンしました。見事に干潟までつくっています。従来、民間デベロッパーが政府の後押しで都市再生特区の制度を使って行っている再開発事業は、公園、緑地をつくったりしますが、本当に公共性をもって市民が親しめるという状態になかなか行っていない。幸い、竹芝棧橋のJRによる再開発、浅草と押上を結ぶ東武鉄道が実現した「東京ミズまち」と「すみだリバーウォーク」など、近年ようやく鉄道会社が頑張っていて、都市の水辺再生にいくつも成果を上げています。ようやくそういう時代になりつつあります。

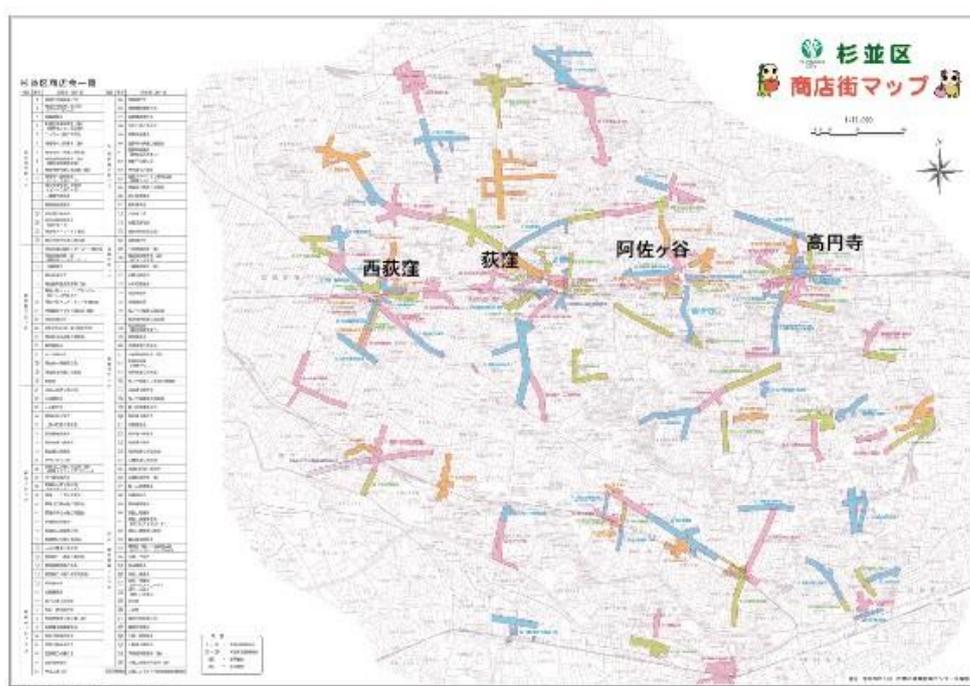
東京都による舟運の社会実験については先ほど述べましたが、晴海のオリンピックの選手村の後が住宅になるなど、晴海、豊洲から海上副都心まで、住宅が広がっているわけです。島に住んでいる人が本当に増えた。そういうこともあり、通勤に船を使うのはあってもいいわけですね。ニューヨーク、ロンドン、ハンブルク、メルボルンでもイスタンブール、上海でも積極的にやっています。そういう中で、東京でやれないはずがないというわけで期待していたのですが、コロナになってしまったので途切れています。これからでしょう。

それから、伊藤滋さん、吉見俊哉さんたちを中心とする東京文化資源区構想があり、私も応援しているのですが、LRTをしかるべきところに走らそう。路面電車ですね。つまり、ゆっくり行こう。歴史的ストックを生かしながら、質の高い、その場にふさわしい開発を、そこにお金をいい形で導いてやっていこうという、そういう提案で、これもまさに大都会の中のスローシティとして可能性があるなと思います。

ヨーロッパはイタリアも含め、今や路面電車が旧市街の魅力向上に大きく貢献しています。ヴェネツィアでも、本土のメストレと結んで島の西端まで実現しています。パドヴァにもフィレンツェにも新しく敷設された。東京にも期待したいところです。

パリの発想を応用して、東京ではどうということが考えられるか。北山恒先生が中心になり EToS（法政大学江戸東京研究センター）で考えた面白い提案があります。東京には、実はすごい数の商店街があるわけです。ほとんどの地域、どこからでも 15 分で自転車、徒歩でアクセスできるところに商店街が必ずあります。そこで、この商店街を日本版 15 分コミュニティとして再生させる可能性があるのではないかという提案です。2021 年の 3 月にシンポジウムが実現し冊子をつくったのですが、雑誌『東京人』が興味を持ってくれて、大々的に特集で発表しました。

自分が住んでいる杉並にも商店街が数多くあります。JR、西武線、井の頭線など私鉄沿線の駅前がもちろん多いです。ただ、それ以外のところにも結構あります。確かに、15 分も行かないでも本当に行けるわけです。



杉並区商店街マップ

実は東京都内、杉並区あたりの商店街はまだ恵まれているほうかもしれない。都内でも商店街の空き店舗が増え、シャッター街が生まれていると思います。全国的には悲惨な状

態ですよ。しかし、日本が培ったこの財産は本当にすごいと思います。そもそも町家というタイプ、建築のタイプは世界にないのです。職住一体でコミュニティをつくっている。一体感のある町並みもできている。地域に根を下ろし、責任を持ち、政治家まで商店街は出したりしますよね。というわけで、職住一体を活かし、若い次世代の人が引き継いでイノベーションをやってくれば相当面白い空間になるはず。そこには共同性がある、コミュニティがある、道はコモンズです。そういうものを復活できないかということです。

東京で成功している事例の1つが、深川の清澄白河です。ここはコロナ禍になる前から、東京で一番面白い旬な地域の一つだと私は言ってきました。ある時期、交通至便の地域で、地価も安い、家賃も安いので、マンションがどんどん立っていたのです。本来、深川、江東は神社やお寺もある。花街はある。木場はある。いろいろな産業、文化、歴史があり、複合空間としての面白さがあり、観光の対象でもあった。それがどんどんマンション街になってしまったら、これはもうつまらなくなると心配したのですが、幸いそういう方向に行かないで済んだのですよね。

というのは、木場の跡地の公園の一角にできていた東京都現代美術館と、新しい地下鉄の敷設で誕生した清澄白河駅の間が結ばれ、面白い動きが出てきたのです。本来、木場が活発だった頃、ここに「深川資料館通り」という商店街があり、ものすごく繁盛したのですが、木場が引っ越してしまってから、もう閑古鳥が鳴いていた。そこに江東区の商業振興で、コミュニティ・カフェがオープンしたのです。ギャラリーでもあり、ここがアート発信基地の一つにもなりました。

もともとここは倉庫群、流通・物流の基地だったので、食糧ビルディングというところに、武蔵野美術大学の小池一子さんという人がプロデュースして、エキジビット・スペースというのができました。そこが現代アートの発信基地になった。そういう遺伝子がどんどん広がり、文房具屋さんの分部登志弘さんという方がリーダーで、かかしコンクールを20年もやっている。北川フラム氏と友達で、大地の芸術祭の棚田にかかしを出展しているのです。この通りに面したお寺の境内でアーティストと組んでインスタレーションを彼が仕掛けました。

この界隈には諸々の活動を担った大きな施設がたくさんあるので、天井が高い。つまり、住居だけ並んでいる地域だと、こうはいかないのですが、産業の地域だった。印刷所もできた。というわけで、器が大きい。それを使い、ギャラリーができる。そして、コーヒー

店ができる。つまり、焙煎のために天井が高くなければいけません。それを狙ってブルーボトルが出てくるというわけで、いま若い人の中でイメージの上がっている地域です。住みたいという人が多い。



倉庫を転用したコーヒーショップ

さらにいいのは、現代美術館が近くにあり、これがオリンピックの前に改装工事のため3年ぐらい休館したのですが、その間にやる気のあるキュレーターの方々が地元に入り、先ほどの分部さんなども協力してもらい、アーティストがいろいろなところ、倉庫、材木屋、印刷所、お寺の境内というところにアート作品を埋め込んでいくイベントを実現しました。大成功して3回もやり、大きなインパクトがありました。

それが刺激になり、今度は町の中に点在している職人、ものづくりの人たちが連携するような動きが出てきたのです。これは本当にすてきなことで、震災に遭っているのに古い建物は限られているのですが、人の営み、コミュニティ、人間関係はまだまだ持続しているのですね。それをもう一回、現代のセンスでつくり上げる。

そこまで言ってきた後で、真の都市再生の成功例を少し紹介したいと思います。まず、都市計画のあるシンポジウムで一緒になった市来広一郎さんが中心となった温泉町・熱海

のサクセスストーリーです。熱海は高度成長期からずっと会社の宴会などに対応する大規模開発ばかりやりってきました。本当は、温泉まちは町を歩く、その面白さがあった。ところが、大きなホテルや旅館の内部で楽しんで帰ってしまう。時代のニーズが変化し、それが全部だめになり、廃虚になってしまったわけです。そこを見るに見かねて、衰退した故郷に戻り、新しい発想で温泉まちの再発見から市来さんは始めたそうです。レトロな建物、歩く楽しさ、女性たちがそういうのを大好きなので、見学会、ワークショップ、まちづくり、リノベーション、いろいろやり、熱海が元気になってきたという話です。移住してお店を開く人も次々に出てきたそうです。これこそが日本版の都市再生の一つのタイプではないかと思います。

もう少し小さい動きは、全国で面白いことがいろいろ起こっています。アルベルゴ・ディフーズ（分散型ホテル）というイタリア語の言葉が、ちょっとアンテナを張っている日本人の方々の間で知られるキーワードになりつつあります。つまりイタリアでも、小さな村、山間部の町は空き家だらけなわけです。それを何とかしたいということから、空き家を活用して分散型のホテルを生み出す試みがなされ、各地で大きな成功をおさめているのです。そういう動きがもう 40 年あるのですね。私の法政での教え子でナポリに長く住んでいる中橋恵さんが森まゆみさんと一緒に、イタリアのアルベルゴ・ディフーズを紹介する本を出版しました（『イタリアの小さな村へ』新潮社、2018 年）。

その動きとは別個に、宮崎晃吉さんという若手の建築家が谷中で似たような動きをやっていたのです。イタリアのこういう動きをキャッチして、中橋さんが向こうのアルベルゴ・ディフーズ協会の会長を日本に連れてきたときに、宮崎晃吉さんが講演会をアレンジしてくれました。日本にこの動きがだんだん伝わっていったけど、そのパイオニアが宮崎さんです。谷中にアルベルゴ・ディフーズを自らつくってきた。

つまり拠点となったのが、彼が学生時代に住んでいた木造の下宿屋です。これをリノベーションして複合施設になった。さらに周りの空き家を取得して分散するホテル、つまりレセプション、泊まる場所、食事どころが別です。食事どころは周りにたくさんありますし、銭湯も飲み屋もある。

そういう動きがいま全国に広がっています。コロナ禍でも驚いたことに、頑張っただけで 20 ぐらいの団体と連携して「日本まちやど協会」がつくられ、素敵な雑誌が創刊されました。その中でも真鶴に生まれた真鶴出版は有名です。

LOCAL REPUBLIC AWARD という賞が数年前に誕生し、私もその審査に参加してい

ます。個人主義が強まった今、自分のことしか考えないわけです。住宅も一家族一住宅、マンションもありますが隣人との付き合いは薄い。本来は町家でも農家でも、経済活動が家の中で行われていました。経済活動があり、コミュニティにつながる、まちづくりにつながるような、そういう形を実現している事例を表彰する賞としてこれが生まれ、その中で最優秀を 2019 年に取ったのが真鶴出版でした。ここは地元の方々が東京の若手建築家と組み、古い木造の家をリノベーションし、出版社だけど、泊まれるし、町の案内もする。こういう動きがメディアでも紹介され、真鶴に引っ越したいという人たちがたくさん出て、開業する人も増えているそうです。



真鶴出版

最後に少し日本版テリトリーオの話をしたと思います。瀬戸内は本来、舟運でつながる大きなテリトリーオだったと言えます。その周りに、小さな単位のテリトリーオがいくつも形成されていました。その1つ、愛媛県の肱川の流域に注目します。瀬戸内海に面した長浜という港町から川を遡ると、大洲という城下町があります。支流の小田川を遡ると内子という産業経済の中心地があります。これらが川の舟運でつながり、原材料、製品を船で運ぶ。これで違う性格を持った都市が連携し、大洲藩という加藤家の殿様の下で、一体感のあるテリトリーオを形づくっていました。



肱川と小田川の舟運が生んだテリトリー

それは鉄道が開通するまで続いて、この地域の繁栄を生んでいました。こうした舟運のおかげで内陸部に位置する内子が繁栄できました。木蠟で稼ぎ、その財で立派な町並みを作り上げたのです。大正時代の内子座でも知られます。町並み保存のパイオニアでもありますね。そして今、新しいリノベーションもどんどん起こっている。「村並み」という言葉も編み出し、農家民宿を手がけ、周辺の農村の棚田や屋根付き木造橋を保存し、水車を復元する動きを先駆的に行ってきました。

この内子と港町、長浜の中間あたりに城下町・大洲があります。美しい風景で、肱川から上がって行くと、戦略上重要な川に面する突端に天守閣が聳えます。実は戦後の再建の木造のものです、天守閣に泊まれるのです。2人、カップルで1泊100万円。でも、アイデアとして面白いですね。そして古い町並みがよく残っている。ここでも空き家が多いのですが、今、その再生がどんどん進んでいる。これはNIPPONIAという空き家を再生する事業を展開している組織が担い、やはり日本版分散型ホテルを展開しています。再生された町家でフランス料理のおいしいのも食べられるのも醍醐味です。実は明日行ってシンポジウムをここでやります。



空き家再生で生まれた大洲の分散型ホテル

そのシンポジウムは何をやるかという、臥龍山荘という明治中期にできた素晴らしい、地元の財界の人、河内寅次郎という人がつくった本格的な数寄屋の建築（重要文化財）と庭（国の史跡）があり、それを活用しながら、文化的な町づくりに広げるための方法を議論しようとしています。世界にも誇れる素晴らしい建築と庭で、遊び心に満ち、元は船でアプローチしていたようなのです。大洲の経済も文化も肱川と密接に結びついていたのです。こういう地域の財産を現代的にどう活かすかが問われています。



臥龍山荘の不老庵

ところが、肱川が生み出したテリトリーオの意識、都市間の密接なつながりが今や全く見えません。トラック、鉄道になり、内子と大洲の関係も行政的にも経済的にも観光的にも全くないのです。サイクリングでつなごうという動きはあります。民間レベルから始めるしかないのかもしれない。舟運がなくなったとしても、かつて連携して地域が繁栄していた姿を想起し、お互いもう一度、現代のセンスでつながっていけば、まさにテリトリーオ再生が実現できるのではないか。

最後にもう一つ考えてみたいことですが、テリトリーオと見ると我々、特に日本では工業、産業の地域はみんな海沿いだなと思っていますよね。国土全体をもう一回見直したほうがいいのではないか。初期の工業化の時代は世界中で日本も含め、内陸部に立地していたのですね。エネルギーは水車です。エネルギーも地産地消だったのですね。北イタリアのトレヴィーゾという町も水路が何本も流れ、水車を使った産業都市で、シーレ川の舟運を通じてラグーナに浮かぶヴェネツィアの都市生活を支える役割を果たしました。ボローニャはもっと内陸に位置する典型的な水車を活かした産業都市でした。ところが、現代はみんな海沿いに工業地帯があると思っている。それがポスト工業化の今、役割を終えているわけですよね。

そうすると、意外に内陸部にいい町があるなとみんな気が付いてきた。ボローニャは井上ひさしさんが『ボローニャ紀行』で絶賛しています。産業都市の記憶を展示する産業博物館では、水車で回して撚糸工程を担い、織物の最先端をいていたこの町の歴史を見事に解説しています。

その進んだ技術がいろいろな経緯でイギリスに渡り、産業革命が生まれる1つの要因になったと言われています。この歴史的なクリエイティブな産業都市としての経験、遺伝子が受け継がれ、ボローニャは超人気のスーパーカーとかバイクを生産する都市となっているのです。そういう歴史の経験、記憶が内陸部の都市に受け継がれているのです。

日本をそういう目でもう一回評価すべきだということで、実はこの間も越前、福井県の越前市不老町に行きました。和紙の産地で、これも川が上っていく。この辺、産業が多いのです。眼鏡で有名な鯖江の町もあります。越前市不老町の和紙の工房では千住博という有名なアーティストが使う和紙を特別に作ったりもしています。

群馬県の桐生も内陸部に位置し、水路で水車を回して絹織物をつくっていました。私達のエコ地域デザイン研究センターと共同研究を始めた千葉県香取市の佐原は、産業といっても流通経済ですが、小野川での舟運で内陸部にありながら経済的にも文化的にも大いに

繁栄しました。こういう地域をあらためて、テリトリーオの視点で再評価する必要がある。

最後、宣伝ですが、法政経営学部のマーケティング専門の木村純子先生、フランスの農業政策を研究している農林水産省の須田文明氏、そして建築、都市計画、歴史の私が集まり、イタリアの研究者たちと一緒に研究し、さらにはイタリア料理研究家とソムリエの方にも寄稿してもらい、『イタリアのテリトリーオ戦略』（白桃書房）という本を刊行します（2022年3月）。「甦る都市と農村の交流」がサブタイトルでして、まさにこうした新しいパラダイムをいま必要としているのではないか。それから、70年代にあれだけ議論されていた地域主義に、もう一回命を与え、新しいフェーズで、つまり成熟社会、人口減少時代に入った今日、あの時代とはまた違う、新たな地域主義について考える必要があるのではないかと思います。どうもありがとうございました。

解題

小島 聡（第46回法政大学大学院まちづくり都市政策セミナー運営委員長）

陣内先生は、今回の基調講演で、今後の都市再生を展望し、また現代の都市文明を再考するために、自然との対話、歴史との対話、人間の関係（コミュニティ）という3つの復権させるべきテーマを掲げ、そこから「新たな地域主義」を提唱されました。講演を振り返りながら、その趣旨を確認すると、近代は都市と田園（農山漁村）の二項対立の構図を世界中に広めていったということでしょう。それは具体的にいえば、都市の際限なき開発と成長、都市による田園の浸食、都市と田園の格差の近現代史であったといえます。

ところが、日本がオイルショックと高度経済成長の終焉を迎えた1970年代に、イタリアは都市再生と田園再生をつなぐ方向へと舵を切り始めました。たしかに日本も大平政権で田園都市国家構想を提唱したものの、それは机上の空論に終わり、20世紀から21世紀前半にかけて、2つの国は異なる道を歩んでいったといえます。

イタリアの都市再生と田園再生をつなぐキーワードとして、陣内先生が強調するのが、テリトリーオ、すなわち地域の地形と自然生態系、気象といった地域環境を基盤としながら経済、食、文化、共同体、建築など、人間社会の営みを総体的に捉える考え方です。それに対して、日本の近代化は、おおよそ地域の履歴の総体であるテリトリーオを解体しながら、都市と田園の二項対立の関係性とその象徴ともいえる東京一極集中が21世紀に入

っても続いてきたといえるでしょう。

その結果、2040年には日本の基礎自治体の半分ぐらいで、消滅可能性が現実味を帯びるかもしれないとまで言われるようになったのです。そういう状況の中で、2020年、COVID-19のパンデミックが始まり、東京一極集中も一時的に沈静化しました。

そこで、本セミナーのタイトルにもかかわりますが、私たちはパンデミックの終息後、再び東京一極集中に回帰すればよいのか、それとも今度こそ別の道を模索すべきなのか、この問いへの解答は、陣内先生ご自身の研究者としての歩みと現代史を重ねた二つの国を舞台とする比較地域論からも明らかでしょう。20世紀的な開発成長政策の延長線上にある都市再生ではなく、陣内先生が1970年代後半にすでに当時のイタリアを手がかりとして提示した都市再生の21世紀におけるあるべき姿とは、テリトリーに、内発的な地域づくりへ可能性を見いだしながら、都市と田園（農山漁村）が自立しつつもつながっていくという、新たな地域主義のシナリオであり戦略でしょう。

またこのことから、僭越ながら、陣内先生の都市再生の思想は、21世紀前半の今日、テリトリーをキーコンセプトとする新たな地域主義の思想へと展開し、この基調講演は、受講者はもちろん社会に対して実践課題を含めたメッセージを発する機会になったともいえるでしょう。

本セミナーは、パンデミックの第5波と第6波の幕間の時期になんとか対面で開催することができました。いずれにしても、やがてCOVID-19は終息するでしょう。しかし、次のパンデミックが遠からずまたやって来るかもしれません。もっと重要なことは、やがて首都直下型地震や南海トラフ三連動地震、さらに甚大な気候災害が来るかもしれません。そうなれば多くの地域が物理的に破壊されるでしょう。

そしてその時、地域のレジリエンスを左右するのも、新たな地域主義を体現した人々による、再生への希望を紡ぎ出す多様な営みでしょう。その意味でも、東日本大震災後から10年がたった東北で今なお挑戦を続ける人々から、私達は学ぶ必要があるはずです。都市の危機とともに再生を問うことは、次の危機に備えることであり、同時に長期的な時間軸で持続可能性を問うことでもあるといえるでしょう。